

2024年 宗会（常会）宗務総長演説（要旨）

2024年5月30日

「声を聞き、声〈御名〉に生きん」－われら今、「同朋社会の顕現」を課題として

ご参会、誠に有難うございます。

常会の開会にあたり、宗務執行の基本姿勢について、「慶讃法要」そして「能登半島地震」という重大なる出来事を経験している宗門は、何を学び得ることができるのか、憶念しつつ申し上げます。

【能登半島地震のお見舞い】

まず、各位ご承知のとおり、本年1月1日に発生した大地震は、能登地方を中心に甚大な被害をもたらしました。地震発生時には、私も地元金沢におりまして、家族と急ぎ避難をした一人であります。今回の震災は、寺院やご門徒の密集度合からして、宗派にとって史上最大級の被災であると認識しております。

現地では、今なおライフラインの復旧もままならず、亡くなられた方のお弔いの最中、非常に厳しい状況が続いております。ここにあらためて、被災された皆さまに心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い日常の回復を祈念いたします。

私自身、1月下旬に能登へお見舞いに伺い、その被害の凄まじさに言葉を失いました。大切なご家族を亡くされた方。どうにか避難はできたものの、お内仏も家屋もすべて失ってしまった方。漁業をはじめ、お仕事が続けられなくなった方など。現地のお一人お一人のことを想いますと、とても日頃の言葉では間に合わない、お見舞いと申しつつも、申し訳なさ、無力感を覚えたことです。

昨年5月（5日・こどもの日）の地震後に珠洲へお見舞いに伺った際、家の補修より先に、生活の依り処たるお内仏を修復されたご門徒に出あわせていただきました。真宗門徒の生活というものをあらためて教えてくださったそのお宅は、今回の地震で全壊してしまい、金沢への避難を余儀なくされました。

しかし、倒壊した家屋から何とかお内仏やご本尊を搬出したいと願われ、その願いに応えた専門性の高いボランティアの方々によって、ご本尊が無事に搬出されました。ご本人は涙して喜ばれ、倉庫に仮安置をし、珠洲と金沢を往復する生活にあって、教務所から勤行本を借りて、念仏の生活を続けておられます。

手を合わせて「なむあみだぶつ」とお念仏申す、そのことは普段何でもない感覚になっておりましたが、そうではないと。南無阿弥陀仏が私に届けられている事実は、本当にただ事ではないと思われました。そして、これは他の人にではなく、必ず自分に向けて申すことなのでありますが、「我々には南無阿弥陀仏がある」と。私には、私たちに、「南無阿弥陀仏がある」んだということを、あらためて心に刻みました。

被災された中であって、仏法を依り処とし日常生活を再建したいと立ち上がろうとされる方、その願いや声に応じて活動されている方、その呼応する姿に大いなる感動を覚えます。

このたびの大災害に対しては、既に人的支援をはじめ、生活環境や財的な支援が始められております。その継続と充実を期しながら、私は、宗門としてできること、本願念仏のみ教えに出遇うことのできた身としての仏教的・大乘的支援というものを、宗門各位と模索し、形づくってまいりたく思っております。内局・宗務役員一同、力を尽くします。どうぞ議員の皆さまにも、一層のご協力をお願い申し上げます。

【宗門存立の本義の受け取り直し】

さて、私として今、共に確かめ直す必要があると思っておりますことは、真宗大谷派が世に在る意味、「宗門存立の本義」ということについてであります。

私どもは、1962（昭和37）年の「同朋会運動」発足以来、その歩みにおいて教団問題、部落差別問題、靖国問題等の重大問題をくぐり、1981（昭和56）年6月の「宗憲改正」をもって、今の教団の形を享受しております。

その「宗憲改正」では、特筆として「前文」が設けられ、宗門運営の根幹、3つの柱が立てられていることは、各位ご承知のとおりであります。今回、私があらためて注視させられていますのは、その第一に掲げられている一句です。「すべて宗門に属する者は、常に自信教人信の誠を尽くし、同朋社会の顕現に努める。」この一句は、「宗門存立の本義」を表すもので、宗門人の使命と責任を表現したものです。「すべて宗門に属する者は」と、我々一人ひとりの責務が公的に誓われた一文であります。宗門人は何に努めるのか、それは「同朋社会の顕現」であると明記されております。私は今、宗門の実情を受け止める中で、この一点にあらためての注意が要る。再度その本意を確かめ直さなければならないと思わされます。

【同朋社会の受け取り直し -根源的回帰の教示】

「同朋社会の顕現」、そこにはどのような問題や課題が我々に突きつけられているのか。その点について、私どもは幸いにして大事な提言をいただいております。それは、3年前の2021（令和3）年4月に開催された「慶讃法要真宗本廟お待ち受け大会」における、池田勇諦先生の講演であります。これは書籍化されていますので読まれた方も多いかと思いますが、重要な内容ですので引用をさせていただきます。

「来る慶讃法要というのは、私どもがお勤めするということに先立って、ご法要から私たちが願われている、要請されているのではないですか。何が要請されているか。それこそは今申した「回帰」、南無阿弥陀仏のこのいのちに回帰する、根源的連帯に帰る。この一点です。なぜ、この一点が強調されねばならないか。もう申すまでもないことでありましようけれども、本当に根源的連帯に気付かせていただくと、世界は同朋世界なんです。社会は同朋社会なんです。これからつくるといような話じゃございません。

すでに、同朋世界、同朋社会に、私たちは生かされている。それを自我に生きる今日の私は、限りなく差別の世界、差別の社会とつくり替えて自損損他し合っているこの現実、それがあぶり出されてきます。だからこそ、根源的連帯に回帰したところに始まる真実の生き方とは何かといったら、その現実と切り結んでいく歩みです。それこそが本当に南無阿弥陀仏のいのちを知らしめられた者の、まことの生き方、具体的な生き方でないのか。しかもその歩みの他に、同朋社会の顕現ということの証しはないに違いありません。その点に注目すればするほど、今回の慶讃法要は、そういう大切な課題を私たちに迫ってきているご法要と言わねばなりません。それが私は、慶讃法要をお迎えする我々の覚悟、ただひとつの覚悟でなければならないのではないのか。そのことを強く教えられるのでございます」と、慶讃法要の意義を仰いました。

如何でしょうか。私はここに重大な問題と申しますか、強めて言えば、これまでの見誤り、思い違いを言下にご指摘いただいたのではないかと感じております。要点としては「根源的回帰」の教示、そして同朋社会は「これからつくるといような話」ではないという警句です。私は能登の震災後にあらためて拝読しまして、これは非常に重大な提起をいただいていたと感じました。お待ち受け大会の時には分からなかったけれども、ここに重大な問題があったのだと思い至りました。

【宗憲改正のいたみ】

その問題とは、一言で申せば「いたみ」であります。「いたみ」、それこそが実は、1981（昭和56）年に至る宗門の動乱、すなわち「宗憲改正」の背景にある先達のご苦心であり、前文の「行間」と申しましょうか、言葉にならなかった、することができなかった「声」と「こころ」。そこに眼を向ける必要がある。そのご教示をいただいているのだと思います。

今からちょうど50年前、1974（昭和49）年の宗門では何が起きていたかと申しますと、「本山本願寺の離脱申請」です。本山が宗派から出ていくという、当時の言葉をお借りすると「白昼夢」であります。それが現実には起きた。もしこの申請が認証されていたならば、東本願寺は真宗大谷派から「独立」、いわゆる宗派離脱をしておりました。明年に再建130年を迎える真宗本廟の両堂は、数多の先人が文字どおり命がけで相続してくださったものです。もしもあの時、歴史の天秤が何かの具合で反対側に傾いていたならば、宗門は本山本願寺を失うことになっておりました。結果的に、嶺藤宗務総長によって離脱申請書は取り下げられましたが、申請者でない者が申請書の取り下げを行うという、この点だけを見ても当時の状況と申しますのは、まさしく異常事態であったことが分かります。

そうして教団問題は、1980（昭和55）年の「即決和解」をもって、一応の決着を見たのであります。あくまでも「一応の」です。その前年には、何が起きていたかと申しますと、後に「分裂報恩講」と言われる本山報恩講での衝突です。嶺藤内局の報恩講警備体制に就く者、その体制に反対を示す者、そして宗派から独立（離脱）した寺院

関係者が法主・管長・本願寺住職を取り巻いているという図式であります。人間の「悲しさ」と申しますか、「痛ましさ」。宗門に縁ある者同士が、意見や立場の違いによって、真宗本廟報恩講の現場で衝突したのであります。

したがって、1981（昭和56）年の「宗憲改正」というものは、平穩無事な中で起草成立していったものではありません。それどころか、人と人の衝突と分断を「直接の背景」として持っています。以前にはなかった「前文」を新しい宗憲に設け、宗門運営の根幹を宣誓する背景には、実は深い「いたみ」が存在している。「いたみ」をもって成り立っている。我々が今、最高規範として享受している「真宗大谷派宗憲」は、「いたみ」を内包しています。

その「いたみ」ということについて、立野義正先生の「語り」が深く印象に残っております。これは、宗祖の七百五十回御遠忌が勤められた2011（平成23）年に述懐された内容です。引用させていただきますと、

「正常化されたことによって本来化ということを見失わしめたということは、これはもう大きな過失であると、いうことまでも言い切ってもいいほどである。それは単なる教団批判じゃなしに、教団をこう悲しむと言えぱちょっと変ですけども、そういう問題を抱えておるということを見逃しておるといふか、見損なっておる罪ということが、今の教団の一つの実態であり、それを自己課題として問い続けていくという一命を我々は背負うておる。この七百五十回忌が「やれやれ済んだ」ちゅう話でなしにですね、その課題を自己課題として、こう一步踏み出すという、そういう機会がこの七百五十回忌というものでなからうか。「やれやれ済んだ」という退廃的なムードを持っておるのも自分、それを破るのも自分だと、こういうことを最近強く感じておるようなわけでございます」

お聞きのとおり、先生は「正常化の罪」ということに触れておられます。それは「本来を見失わせる罪」であると。私はこれを初めて読みました時、あらたな確信を持つことができました。自分は正しいのだと、間違いないと思ってやってきたことが、やってきたことが、如何に狭く、仏法を貶めることであつたか、痛ましいことであつたかということ、先生は30年の年月を経て懺悔告白されています。このようなことは容易に口にできることではありません。しかし同時に、宗門活動の根にある問題点をご指摘なさっておられます。すなわち「考えの正しさの主張が問題を見えなくする」ということです。これこそが、宗祖親鸞聖人におかれても、御一生を貫く問題であつたと確信いたします。

今あらためて、こうした先達の告白にも導かれ、思わされますことは、私はこれまで宗憲前文の精神、宗門存立の本義と言われてきた「同朋社会の顕現」という一句を、果たして一度でも、「いたみ」をもって受け止めたことがあつたのだろうか。単に何か気持ちの良い、具合の良い世界をイメージするだけで、その奥にある悲しみ、言葉にならなかつた、できなかつた「悲痛」というものを感覚できないまま、今を迎えているのではないかと。極言するならば、私は40年以上、「同朋社会の顕現」を免罪符として、

安逸を貪ってきたのではないかと。

宗憲改正は、「同朋会運動あつての宗憲改正」でありますから、願いに突き動かされてのことです。しかしそこには、単に願いというだけでは十分ではない、確かな、身近な、「いたみ」がある。衝突、分裂、分断という現実を直接の背景として成立しているのが現宗憲である。この一点を、我々は今こそ受け取り直さなければならない。それは、宗門がこの世に存在している意味を、今日まさに世から問われているからであります。

【同朋社会の顕現に努める具体性】

先の池田先生の提起を拝受いたしますと、同朋社会というものは人の考えでつくるものではない。そして、宗憲改正当時の現実には、衝突と分断を背景としている。しかし、「それでも」であります。それでもなお、「同朋」を標記するのだと。新しい宗憲の精神として「同朋社会の顕現」を宣誓するのだと。現実とは言えば、どこまでも分かり合えない現実です。けれども掲げる、誓うのですと。それが先達の言葉にできなかった「いたみ」であり、心の奥にあった「志願」であると思います。

「世界は本来同朋世界」である。しかし現実には、同朋と口にしても同朋にはなれない。同朋社会と明記しても同朋社会とは感じられない。これが我々一人ひとりの実感ではないでしょうか。それでも放棄するわけにはいかない、捨てるわけにはいかない問題がある。それこそが「南無阿弥陀仏による根源的回帰」であり、「御同朋」の響き、「同朋社会の顕現」という一句が、我々に投げかけてくれている一大事なのであります。

そのことを宗祖は、『教行信証』の結びに、「唯、仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲を恥じず。若し斯の書を見聞せん者、信順を因とし、疑謗を縁として、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さん」と銘記されております。

「信順を因とし疑謗を縁と」する。それは決して他人事でないのでしょうか。信順も、疑謗すらも、如来から賜わる恵みであり、それこそが「南無阿弥陀仏による根源的回帰」へと促してくださる。人は、人の考えでもって、解放されるということはありません。我々は既にして「凡夫」と教えられております。ですから人間には、必ず「教え」が必要です。その教えに生きた先達、南無阿弥陀仏の声を届けてくださっている、最も身近な「その人」が宗祖親鸞聖人です。

なぜ宗祖が『教行信証』を著されたのか、慶讃法要をお迎えした我々は、その動機を聞き尋ねていかなければなりません。「南無阿弥陀仏あればこそ」と、宗祖は自身のこととしていただかれた。南無阿弥陀仏あればこそその私なのです。これが「真宗再興」の一道に他ならない。この一点を今、「我らの出発点」として、相共に確かめたく思うのであります。

【声を聞き、声〈御名〉に生きん】

では、その「いたみ」をもって誓われた「同朋社会の顕現」は、今日を生きる私どもに、具体的に如何なる課題として提起されているのか。それを同じく宗憲前文の一句、「常に自信教人信の誠を尽くす」に見出す必要を思います。これに尽きるのであります。

以前に恩師から教えられたことですが、この善導大師の聖句「自信教人信」を宗祖が『教行信証』にいただける際、その読みを「みずから信じ、ひとを教えて信ぜしむる」と記しておられます。これについて師は、「ここに宗祖親鸞聖人の尋常ならざる熱意があります」と語ってくださいました。もちろん「親鸞は弟子一人ももたず」でありますから、自分の考えで教え導くということではございません。しかし、その上でなお、「ひとを教えて」と仰っています。このことを私なりに申せば、「愚禿釋親鸞」の責任としての表現であろうと思います。稀有最勝の教えに遇えた「ひとり」としての責任。南無阿弥陀仏の声を聞いた、声が聞こえた者としての責任が、自信教人信を「みずから信じ、ひとを教えて信ぜしむる」と読ませた。そう受け止めました。

では、その御一流にあずかる私どもの責任、使命とは何か。それは「声を聞き、声に生きる」ことであります。「声を聞く」、これは一見何でもなようなことですが、実は大変困難なことではないでしょうか。人の話を聞いているようで聞けていない。聞いているふりはしているが聞いていないということが、偽らざる姿ではないでしょうか。その事実を、我々は幸いにして南無阿弥陀仏の声に気付かされます。殊に「声なき声を聞く」、すなわち「自らの内なる声」、また他者の「言葉にならない心や思念」というものを、互いに想い合い、聞き合うこと。それこそが「同朋社会の顕現」を誓った宗門に属する者の使命、その第一歩であると思います。

その声というのは、何も今生きている人に限りません。先ゆかれた大切な人。その人が大切に手を合わせていたお内仏。御同行が相集い支えてきた本堂。それらのいちばん根源に「南無阿弥陀仏の声」がある。そのことを慶讃法要で両堂に鳴り響いたお念仏の声、地震を経験された能登の方々が、私にあらためて教えてくださいました。

南無阿弥陀仏の声、本願の名号ということで一点申しますと、『仏説無量寿経』下巻、「三毒段」における弥勒菩薩の告白に「今仏に値うことを得て、復た無量寿仏の声（みな）を聞いて歡喜せざるもの靡し。心、開明することを得つ」とございしますが、この「無量寿仏の声」、宗祖はこの「声」の文字に「みな」と読み仮名を付されています。「こえ」と書いて「みな」と読ませる。それを私なりに拝受して申せば、「根源の声は御名である」。「声は即ち南無阿弥陀仏である」。よって浄土真宗は、「聞其名号 信心歡喜」に始まり、「聞其名号 信心歡喜」に帰結すると。

そのことを宗祖は、『教行信証』信巻に銘記されています。曰く、「聞」と言うは、衆生、仏願の生起本末を聞いて疑心有ること無し。是れを「聞」と曰うなり。「信心」と言うは則ち本願力回向の信心なり。「歡喜」と言うは身心の悦予の貌を形すなり」と。そして、『歎異抄』における「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と仰るその心が、宗憲前文に誓われた「常に自信教人信の誠を尽

くす」ことに直結すると思うのであります。

「同朋社会の顕現」という言葉の背景にある「いたみ」。それを再確認する必要がある。すなわち「声を聞き、声に生きる」とは、「声を聞き、御名に生きる」ことでもあります。この一点が私ども一人ひとりの主題にならない限り、同朋社会が顕現するという事は無いのであります。そのように祖師先達は教えてくださっています。

宗門には、現に重たい課題、難しい問題がありますが、どうか共に、「仏願の生起本末」を聞いてまいりましょう。一体なぜに、この自分に南無阿弥陀仏が届けられているのか。その「いわれ」に耳を澄ませることを、あらゆる宗門活動の根底に堅持いたしましょう。そして一つの行事、一つの数値、一つの文章の奥に、どのような「声なき声」があるのか、背景があるのか。そうしたことを分かったことと済まさず、静かに耳を傾けてまいりましょう。私はそれが「教団を尽くす」ことであり、願われる宗門の形をつくっていく確かな一歩であると思います。相共に南無阿弥陀仏の「すがた」を一生かけて尋ねていく。そのことをもって「同朋社会の顕現」、宗門存立の本義を現代に表さんと念ずる次第であります。

【2024年度の主な取り組み】

それでは、これまで縷々述べました、慶讃法要の厳修と震災の危機を通してあらためて気付かせていただいた、宗門存立の本義。同朋社会への根源的回帰。享受している現宗憲にあるいたみ。これらを立脚地として憶念しつつ、2024年度の主な宗務について、3点申し上げます。

1点目は、宗務改革について。一昨年に表明いたしました「真宗再興」を指標とし、関係各位にご尽力を賜りました「行財政改革検討委員会報告」の趣意を体として、具体的な検討を進めてまいります。

委員諸氏からは、さまざまな現場を持つ方が参画されたことによって、幅広い意見を聞き合えたことが有り難かったとの声を頂戴したことであります。

報告書を得て、今宗会を経て組織改編をする「行財政改革推進本部」において、物事の重要度や優先順位等を見定め、順次でき得ることから着手してまいりたいと思うことであります。

この場をお借りし、委員各位に心より御礼を申し上げます。有り難うございました。

併せて教区改編については、今宗会を経まして、新たな京都教区が誕生いたす運びであります。関係各位のご尽力に、深甚の敬意を表するものであります。

また、本年1月に調査を開始した「第8回教勢調査」は、震災の影響により能登教区の寺院からの回答期限を6月末に延長しておりますが、宗門各位のご協力により（能登教区を除く5月27日現在）95.5%の回答をいただいております。今後分析を進め、教団の現在状況を把握し、17教区制となる予定の2026年度以降の宗門を形づくる統計資料として、適切に活用してまいる所存であります。

2点目は、「是旃陀羅問題の課題共有」について。この「問いかげ」は、浄土真宗に

生きんとする我々一人ひとりにとって大変重要な課題であります。正依の經典である『仏説觀無量壽經』において、宗門が、僧侶が、差別を助長する解釈をしてきた責任を非常に重く受け止めております。

全寺院に配布しております学習冊子やテキストを輪読して学び合うこと自体が、かつて宗門の教学教化の基盤として、全国各地に数多点在した「自主学習会」を再興していく取り組みにもなることを願っています。その呼びかけを担っていただく人の養成を図るとともに、補助教材等の充実にも尽力してまいり所存です。

正依の經典をあらためて学び合い、『觀經』の言葉を正確にいただくことを通して、この問題を一人ひとりが悔過し、「不断の歩み」とすべく、各位におかれましても、各地の学習会・研修会等の充実にご尽力くださいますよう、お願い申し上げます。

3点目は、教区慶讃法要について。各教区で準備が進められております教区慶讃法要は、宗祖の御誕生と立教開宗が自らの学びとなるよう、『教行信証』坂東本、つまり宗祖に触れる機会として進めていただくことを願い、今演説で申し述べました趣意の広がりや深まりを期待しつつ、各教区における盛儀を念願いたしております。

その他、青少幼年教化をはじめとする重点施策、聖教編纂事業、都市圏教化等、各取り組みの詳細は、教化研修計画概要及び予算に譲ることといたします。

なお、「真宗本廟を中心としたグローバルデザイン」、「別院の将来構想」、「大谷祖廟総合整備」に関する各宗務審議会においては、2024年度中に答申をいただく予定であります。

これら諸施策・事業においては、そこに遭遇が生まれ、「声を聞き、御名に生きる」一人の人、その誕生を期し、丁寧に進めてまいります。

以上、各位には意のあるところをお汲み取りいただきたく、よろしくお願い申し上げます。

【むすびに】

本日この場を皆さま方と迎えて、あらためて思いますことは、宗門の御恩ということでもあります。宗門というものがあつたから、この私もかけがえのない友人に恵まれました。今日お集まりの皆さんとのご縁も大変に尊いものです。

仏法の僧伽と申すものは、やはり「これからつくる」という話ではないのでしょうか。どこまでも僧伽は、道を求める中で自ずと召されるものであります。その出来事も、どこか遠くに描かれるものではなく、この私に起こる。私が起こすのではなく、南無阿彌陀仏によって起きるのだと、そう教えられました。

能登の現状をはじめ、現代社会は各方面で非常に危うい状況に至っております。その中で自分は、我々は、どう歩むのかが常の問題であります。「設い世界に満てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞かば、会ず当に仏道を成ずべし。広く生死の流を度せん」と『仏説無量壽經』に著されます「いたみ」と、「無窮の志願」を、共に同じ時代を生きる我らとして、「声を聞き、御名に生きる」、一つひとつの出来事を大切に紡いでいけた

らと願っております。

以上といたします。ご清聴、誠に有り難うございました。

以 上